

Lieber Herr Sokler —

Besten Dank für Ihren freundlichen Brief,
 der mir die gute Nachricht Ihres baldigen
 Besuches in Düsseldorf bringt. Ich freue
 mich sehr darauf und meine Frau und
 ich bitten Sie doch unser Gast zu sein,
 wenn Sie nicht Gründe haben, die Ihnen
 eine Wohnung im Hotel notwendig er-
 scheinen lassen. Jedenfalls sind Sie
 uns herzlich willkommen.

Zu Ihrem Besuch in unserer Schule stehe ich
 Dienstag morgen $\frac{1}{2}$ Uhr zu Ihrer Verfügung.

Einschließen mit bestem Gruß
 Ihr ergebener
 Lehmann.

ムテジウスに宛てたペーレンスの手紙 (1903年7月15日付)

SYUNKEN
駿建

1997.11 Vol.25 No.3 秋期号
 日本大学理工学部 建築学科
 短期大学部 建設学科建築コース

建築家の筆跡

研究の性格上、建築家の手紙を相手にすることがある。20世紀初頭のドイツ、多くの手紙はすでにタイプ打ちだが、なかには自筆のものもある。さあ、これが大変だ。アルファベットさえ判読できない。まるで暗号を解読するように、ときにはくずし文字の対応表をつくりながら、一語ずつ読み解いていく。手間のかかる作業ではあるが、建築家たちの生の声に触れることができる。

筆跡から建築家のことをいろいろ想像してみてもいい。育ちの良さがたまたようグロピウスの署名(下)、ムテジウスの筆跡(右)はどこか神経質そうだ。太い万年筆を使う、無骨なペーレンスの字(上)からは、豪放磊落といわれるその性格がうかがえる。

(短大助手・田所辰之助)

Mit herzlichsten Grüßen
 bin ich Ihr anhänglicher
 ergebener
 W. Gropius

Zentrale in Weimar curatel.
 4. Post-Kreis am 18. Tag
 30. der Division.

グロピウスの手紙の結び部分 (1918年1月18日付)

Valid for six months!
 Gültig für sechs Monate!

Safe conduct.

Geleitschein Reihe A. № 001034 *

VALID FROM - 4. Juli 1924 TO 4. Sep. 24

SUBNAME: *Muthesius*
 Zuname:

CHRISTIAN NAMES: *Hermann*
 Vorname:

PROFESSION: *Sch. Regierungsrat*
 Beruf:

NATIONALITY: *Preussin*
 Staatsangehörigkeit:

BORN ON THE: *21. 8. 61* AT: *Lepp-Neuhausen*
 Geburtsort:

RESIDING AT: *Berlin, Kladow*
 Wohnort, Straße und Hausnummer:

IS AUTHORIZED TO ENTER AND LEAVE THE BRITISH ZONE!
 Erlaubt für die Britische Zone die Genehmigung zur Ein- und Ausreise

POINT OF ENTRY INTO
 Einreiseort nach

POINT OF EXIT FROM
 Ausreiseort aus

OCCUPIED TERRITORIES
 Am besetzten Gebiet:

ISSUED AT COLOGNE ON THE
 Ausgegeben in Köln am
 - 4. Juli 1924

BRITISH CONSUL
 British Zone

ムテジウスの英国入国許可証 (1924年)

1997年度日本建築学会大会 (関東支部設立50周年記念大会)開催



理工学部船橋校舎を
主会場として、9月13
日(土)、14日(日)、
15日(月)の3日間に
わたって開催された日
本建築学会大会は、学
術講演会発表題数5,488
題、延べ26,000名を越
える参加者を集めて大
成功のうちに終了した。

本年度大会の企画お
よび実行は日本建築学会関東支部(支部長:平山善吉教
授)が担当、会場校である理工学部からは、建築学科、
海洋建築工学科、短期大学部建設学科建築コースの先生
がたが総動員でその準備と運営にあたった(表1)。多
くの大学院生や学部学生も半ば強制的に、あるいはボラ
ンティアとして自ら積極的に準備や大会当日の運営に参
加し、アカデミックな論文発表・討論や研究協議会等へ
の出席、または講演会、各種イベントなどを体験し、
得難い経験を積まれたことと思う。

本大会の基本テーマは「海、緑、そして建築 環境と
技術のゆくえ」。このための特別企画としては、今井
通子(大自然を旅して)、C.W. ニコル(In our nature
人と自然との共生)、二氏の講演会と公開シンポジ
ウム(まちづくりと海 よりよい市民生活のための豊か
な海岸環境づくり)が準備され、合計590名余の一般
市民がこれらの企画に参加して、建築学会会員との交流
が行われた。

この他、理工スポーツホールでは、「建築・環境と子
供たち 未来への架け橋」と題する展示(親と子の都
市と建築講座)とワークショップ(やってみよう まち
づくり)、フォーラム(わくわく交流会)などが行われ、
船橋、習志野、八千代各市の教育委員会の全面的な協力
を得て、地域の小・中学生たちが建築学会のボランティ
アグループと一緒に「建築」を体験し、ユニークな創造
活動のひとつを楽しんだ。

同時に開催された「技術と建築 建築技術模型展」
では、各企業から出展された最新の建築技術に関する模
型やパネルがテーマ別に展示され、「目で見る新技術」
が市民に大好評であった。また、インターネットを利用
したコンペ入賞案や習志野ドーム、協賛企業による膜構
造の屋外展示も行われた。構造研究会や斎藤研究室の卒
研究生、大学院生の努力で、キャンパスのあちこちに建設
された合計13体にのぼるこれらのテンポラリースペ
ースは、会期中、休憩所、物産展会場などに効果的に利用
された。

近年整備されつつある昭和基地の新しい居住棟の実大

部分模型(個室1戸分)
も南極建築のパネルと
ともに1階アリーナの
一角に展示された。11
月14日に出発したわが
国初の女性越冬隊員2
名は、この新居住棟で
南極の冬を初体験する
予定である。

大型構造物試験棟で
は、この企画展示の一

環として免・制振技術模型の展示と、大型振動台を使っ
た地震体験および石丸研究室と外部企業の共同開発によ
る木造制振システムの公開実験が行われた。これらの特
別企画には3日間で延べ3,000名の市民が参加した。

ファラディーホールの2階では建築学会情報システム
技術委員会、情報CAAD教育小委員会と共催で「情報
とCAAD教育の現場展」が行われた。建築学会の委員
会活動紹介、30校の大学、専門学校などが参加した
CAAD作品展、協賛企業12社のCAAD教育用ツールの
提案・展示、インターネットサービス、講演とパネルデ
ィスカッションなどが行われ、3日間で延べ2,000名が
会場を訪れた。

9月13日の夜、理工スポーツホールで行われた大会
懇親会には、平山ルートで国立極地研究所から「南極の
氷」が提供され、気の遠くなる年月をかけて加圧・圧密
された氷の中に閉じ込められていた太古の空気が琥珀色
の液体の中で圧力解放されるときに発するピチピチとい
う軽快な音を楽しみながら、和やかな会話がはずんだ。

本年は日本建築学会関東支部設立50周年にあたり、
この記念行事の一環として、建築学会の年に一度のビッグ
イベントが船橋キャンパスで行われたが、天候にも
恵まれ、全体として近年になくクレームの少ない、成功
した大会であった。日本で一、二位を争うオソロシク高
価な運賃が唯一の欠点である東葉高速鉄道開通のおかげ
で、都市郊外とはいえ交通至便なキャンパスが実現し、
13号館、笠原記念館、理工スポーツホール、中央庭
園+食堂棟など、他に誇れるキャンパス計画の核が完成
した段階で、非常にタイミングのよい時期に開催できた
ことも成功の一因かもしれない。

いろいろな形で参加した学生諸君の対応も、組織の一
員として礼儀正しく、統制のとれた行動が学会事務局や
学外の実行委員の先生がたから高く評価されたことを付
け加えておこう。

以上、建築学会大会の特別企画を中心に紹介したが、
学術講演会については別稿で報告される。

(編集委員会)

表1 1997年度 日本建築学会大会(関東)実行委員会

大会委員長			
平山 善吉(支部長・日本大学教授)			
実行委員会			
顧問	沼田 武(千葉県知事)	松井 旭(千葉市長)	藤代 孝七(船橋市長)
	荒木 勇(習志野市長)	大澤 一治(八千代市長)	坂本 守正(日本大学教授)
	榎並 昭(日本大学名誉教授)	木村 翔(日本大学教授)	小嶋 勝衛(日本大学教授)
	小林 美夫(日本大学教授)	西村 敏雄(日本大学教授)	服部 岑生(千葉大学教授)
	宮澤 鉄蔵(千葉工業大学教授)		
委員長	佐久田昌昭		
副委員長	安達 洋・工藤 恒雄・斎藤 公男・本岡順二郎・山中 右一		
部会顧問	石丸 辰治・吉田 燦		
総務部会			
部会長	若色 峰郎		
幹事	柳田 武		
委員	伊澤 岬・宇杉 和夫・岡村 武士・黒木二三夫・小松 正樹・佐藤 慎也・清水 五郎 関沢 勝一・高宮 真介・巽 耕一・中山 優・新谷 隆弘・信澤 宏由・橋本 修 堀田 久則・山田 雅一・渡辺 富雄		
会計部会			
部会長	半貫 敏夫		
幹事	白井 伸明		
委員	井上 勝夫・戸田 哲雄・富島 誠司・内藤 正昭・永橋 進・森泉 和人		
会場部会			
部会長	増田 光一		
幹事	近藤 典夫		
総務設営			
ヘッド	川西 利昌		
幹事	桜井 慎一・中西 三和		
委員	岡田 恒・神園 勝彦・西條 修・下村 幸男・坪山 幸王・古谷 誠章		
学術設営			
ヘッド	国府田 誠		
幹事	佐藤 秀人・登川 幸生		
委員	新宮 清志・曾田五月也・浜原 正行・横内 憲久・横山 清		
行事設営			
ヘッド	近藤 健雄		
幹事	岡本 強一・畔柳 昭雄		
委員	岡田 満・末次 宏光・緑川 光正		
行事部会			
部会長	片桐 正夫		
幹事	堀田 健治・本杉 省三		
委員	安達 俊夫・足立 守・浅香 勝輔・稲田 泰夫・宇於崎勝也・大川 三雄・大塚 喜康 岡田 章・落合 千秋・小石川正男・佐藤 信治・佐藤 直樹・斉藤 俊一・沢田 研自 重枝 豊・神保 憲二・関口 克明・田所辰之助・玉木 真助・戸塚 晃・中島 禎男 中野 時衛・中村 雅紀・永井 潔・根上 彰生・蜂巢 浩生・蜂巢賀達志・藤居 秀男 前田 厚雄・安井 譲・山本 和清・渡邊 秀夫		
懇親部会			
部会長	野村 歆		
幹事	石田 道孝		
委員	羽入 敏樹 三橋 博巳 八藤後 猛 吉野 泰子		



一般市民受付（左）と13号館総合受付へのアプローチ



総合受付で働く建築学科1年生ボランティアグループ



13日に行われた記者会見



1997年度日本建築学会大会開会式



参加者に好評だった食堂棟広場



受付をすませてそれぞれの会場へ（13号館広場）



連日熱心な討論が行われた学術講演会



スポーツホールの「技術と建築 建築技術模型展」

1997年度 日本建築学会大会(関東) 建築学科教室関係者発表論文リスト

本年度の日本建築学会大会は、関東支部設立50周年記念大会として理工学部船橋キャンパスで開催された。建築教室の先生がたは、大会委員長を務めた平山善吉教授をはじめとして、当番校の義務である大会運営を担当するかたわら、学術講演会では日頃の研究成果をそれぞれのセッションに分かれて発表した。今年の春から新しい世界に入った大学院O.B.や現役の大学院生たちも先生がたと連名の論文を緊張しながら発表する姿があちこちの会場で見られた。9月中旬のわりに暑すぎず、台風の影響もない快適な環境で研究発表や研究交流ができたことと思う。例年のように、本大会で発表された教室関係者の研究論文リストを分野別に整理して以下に示す。学生諸君はこれらの情報から各研究室の研究活動の一端を知り、卒業研究着手の参考にさせていただきたい。

また、それぞれ関連分野の先生がたにお願いして、各セッションごとの中心的話題や研究動向についてコメントしていただいた。本年の担当者は次の通りである。

材料・施工・防火 構造	半貫敏夫教授 新谷隆弘助手 山田雅一助手 岡田 章助手 白井伸明教授 蜂巢浩生助手 宇杉和夫専任講師 根上彰生助教授 大川三雄助手
環境工学 建築計画	
都市計画・建築経済・住宅問題 建築歴史・意匠	

印 発表者 *印 ポスターセッション

材料・施工・防火

- 1002 昭和基地で打設されたアルミナセメントコンクリートの施工と特性について 内藤正昭(日本大短大)・平山善吉
- 1116 高強度高流動コンクリートの初期ひびわれの評価方法 平石信也(山宗化学)・横山 清・笠井芳夫
- 1117 高流動コンクリートのコールドジョイントに関する基礎的実験研究(その3:高流動・軽量コンクリートの打足し特性) 山本祐基子(三菱建設)・藤井和俊・毛見虎雄・清水五郎・佐久田昌昭・宇仁菅康行・柳澤敦志
- 1118 高流動コンクリートのコールドジョイントに関する基礎的実験研究(その4:促進中性化試験,簡易透水試験による検討) 柳澤敦志(三菱建設)・藤井和俊・毛見虎雄・清水五郎・佐久田昌昭・宇仁菅康行・山本祐基子

材料・施工・防火

本年の材料・施工分野の研究発表題数は563題であった。材料分野では伝統的にセメント、コンクリート関係の研究が多いが、補強鉄筋の腐食、コンクリートの耐久性の問題に関連したレトロフィット材料の開発研究、あるいは地震被害を受けたコンクリート部材の補修・補強材料に関する開発・調査研究が特に目についた。この他、環境問題に関連してエコマテリアル、リサイクルコンクリート、再生骨材利用等の、建築材料生産の省エネルギー化を指向した研究が活発になってきた。施工分野では、建設労働者の技術力の低下をカバーし、かつ人件費を抑

えるための自動化・合理化工法がメインテーマである。本学からは南極のコンクリートについて1編、高流動コンクリート関係で3編の発表があった。

防火分野の研究発表は118題、岸谷孝一教授亡きあと、今年は教室関係者の発表はなかったが、本学O.B.はいろいろな部署で活躍しており、例えば志田弘二名古屋市立大助教授(木下研O.B.)など、所属を変えて研究が継続されている。この分野は各種建築材料の耐火性から都市防災まで学際的で幅広い研究が可能であり、しかもまだ研究者の数が少なく、魅力的なテーマが多い。大学院生の積極的なアプローチが待たれる。(半貫敏夫)

構造

- 20296 壁を平行移動した場合の受働土圧に関する実験的研究(その1 土圧分布について) 和田昇三(足利工大)・国府田 誠・榎並 昭
- * 20333 セメント系砂質改良土の強度・変形特性(その1 室内配合試験) 山田雅一(日本大)・安達俊夫・榎並 昭・青島真二
- * 20348 長期荷重を受けるRC基礎梁の変形性状と耐力に関する実験的研究(その4:せん断ひび割れ発生時の限界変形角) 星 智典(日本大)・榎並 昭・川辺一洋・安達俊夫・山田雅一
- * 20388 エネルギー概念に基づく間隙水圧モデル 鴨下順司(東京電力)・安達俊夫・山田雅一・榎並 昭
- * 20389 液状化発生時の地震動強さに関する有効応力解析(その1 スペクトル強度に基づく間隙水圧モデル) 塙 隆憲(日本大)・安達俊夫・山田雅一・丘 将・榎並 昭
- * 20390 液状化発生時の地震動強さに関する有効応力解析(その2 日本の主要都市地盤モデルによる解析的検討) 丘 将(日総建)・安達俊夫・山田雅一・榎並 昭
- 20399 MJG式ガラス支持ケーブル構造の力学特性と適用性に関する研究(その1) MJGシステムの変形性能について 田中佳奈子(日本大)・斎藤公男・岡田 章・今村柳輔
- 20400 MJG式ガラス支持ケーブル構造の力学特性と適用性に関する研究(その2) ガラス支持ケーブル構造の力学特性 今村柳輔(日本大)・斎藤公男・岡田 章
- 20404 テンションリングを有する放射型ケーブル屋根構造の構造計画に関する研究(その1) PS設定手法について 今井克彦(日本大)・斎藤公男・岡田 章・小林哲也
- 20405 テンションリングを有する放射型ケーブル屋根構造の構造計画に関する研究(その2) 施工計画について 小林哲也(新日本製鐵)・斎藤公男・岡田 章・奥野智久
- 20406 MODULAR ARCH SYSTEMの風圧分布性状に関する研究 力瀬康介(日本大)・斎藤公男・黒木二三夫
- 20412 張力膜構造におけるケーブル置換法の適用性に関する研究(その2) ケーブル境界を持つHP型曲面について 木村正豪(久米設計)・斎藤公男・黒木二三夫
- 20426 ケーブル補強されたアルミニウム張弦アーチ構造に関する研究 城戸隆宏(山下設計)・斎藤公男・岡田 章
- 20429 テンション・グリッド・ドーム(TGD)のストリング効果に関する基礎的研究(その1) TGDの実験的検討 久保田 淳(日本大)・斎藤公男・岡田 章・檜山裕二郎・奥原剛彦・大塚 剛
- 20430 テンション・グリッド・ドーム(TGD)のストリング効果に関する基礎的研究(その2) TGDの解析的検討 大塚 剛(三菱重工業)・斎藤公男・岡田 章・檜山裕二郎・奥原剛彦
- 20431 テンション・グリッド・ドーム(TGD)の力学的特性に関する基礎的研究(その3) 構成部材と仕事密度 細澤 治(大成建設)・斎藤公男・岡田 章・島村高平
- 20432 テンセグリティ・トラス構造の基本特性に関する実験的研究(その1) 構造概要及び数値解析 小西泰孝(佐々木睦朗構造計画研)・斎藤公男・岡田 章
- 20433 テンセグリティ・トラス構造の基本特性に関する実験的研究(その2) 施工及び載荷実験 松崎彦英(日本大)・斎藤公男・岡田 章・小西泰孝
- 20435 多雪地域における大規模張弦ドームの構造計画に関する一考察(その1) 常時荷重時における最適張力について 竹川正慶(日本大)・斎藤公男・岡田 章・小林真一郎
- 20436 多雪地域における大規模張弦ドームの構造計画に関する一考察(その2) 積雪荷重時における構造特性および施工計画 小林真一郎(構造計画プラスワン)・斎藤公男・岡田 章
- 20437 木造張弦梁構造の継手接合部に関する実験的研究 小野塚真規(日本大)・斎藤公男・岡田 章・伊藤博之
- 20462 金網補強アイスドーム構法の実用化に関する課題について 1 模型実験による検討 小泉 豪(日本大)・田中寿幸・勝山範之・半貫敏夫
- 20463 金網補強アイスドーム構法の実用化に関する課題について 2 力学応答に関する数値解析的検討 勝山範之(石川島播磨重工業)・田中寿幸・小泉 豪・半貫敏夫
- 20513 競技場スタンドを覆う片持式屋根構造の構造計画および風荷重に関する研究(その3) 側面板を用いた簡易風洞模型の適用性について 金田崇興(日本大)・斎藤公男・黒木二三夫・岡田 章・竹川正慶
- 21079 地中地震計記録の固有直交関数展開 森川和彦(日本大)・石丸辰治
- 21142 震源モデルによる確率過程入力地震動の作成について その1 2つの1質点系の直列モデル 藤本元久(日本大)・石丸辰治・江原栄次
- 21143 震源モデルによる確率過程入力地震動の作成について その2 移動震源を考慮した1質点系モデル 浅沼裕之(西松建設)・石丸辰治・高井茂光
- 21217 近傍地盤の不均質性を考慮した埋込み構造物の簡易手法による検討 池田能夫(大成建設)・下村幸男

- 21220 台湾花蓮における大型模型構造物の国際地震ブラインド解析 統一地盤モデルに基づく参加各機関による解析結果の整理
花里利一(田治見エンジニアリングサービス)・田治見 宏・松本尚志・色摩康弘
- 21227 擬似速度応答スペクトルとエネルギー入力率との相関性について
岡本博通(日本大)・石丸辰治
- 21238 確率過程によるねじれ応答の基礎的研究
神永敏幸(安藤建設)・石丸辰治・新谷隆弘
- 21382 制振構造におけるモデル・フォロイング制御則の応用(その2 単一機構による複数の振動モード制御)
新谷隆弘(日本大)・石丸辰治・長島和央
- 21383 制振構造におけるモデル・フォロイング制御則の応用(その3 ゲイン設計法)
長島和央(オイレ工業)・新谷隆弘・石丸辰治
- 21421 安定・不安定結合型振子を利用した制振装置の開発に関する研究 その3 実証実験及び幾何学的非線形性の改善
大江禎一郎(日本大)・石丸辰治・新谷隆弘・平林宏樹
- 21435 増幅機構を用いた制震構造システムに関する基礎的研究(その1 基本原理)
久保田雅春(飛鳥建設)・秦 一平・石丸辰治・新谷隆弘
- 21436 増幅機構を用いた制震構造システムに関する基礎的研究(その2 トグル機構の増幅率について)
秦 一平(日本大)・久保田雅春・石丸辰治・新谷隆弘
- 21437 増幅機構を用いた制震構造システムに関する基礎的研究(その3 基本的な制震性能の検討)
本間 剛(日建ハウジング)・久保田雅春・秦 一平・石丸辰治・新谷隆弘・帆刈大慈
- 21438 パッシブ型制震構造物の性能設計法について(その1 基本概念)
石丸辰治(日本大)・宮久保亮一
- 21439 パッシブ型制震構造物の性能設計法について(その2 複素固有値問題の解析例)
平野賢司(日本大)・石丸辰治・宮久保亮一
- 21440 パッシブ型制震構造物の性能設計法について(その3 最大応答の推定例)
宮久保亮一(石本建築事務所)・石丸辰治
- 21479 水平二方向に駆動する振動発生装置の試作 その3 大規模モデルに対する制振/加振実験
中村 豊(鉄建建設)・石丸辰治・林 郁夫・新谷隆弘・長島和央
- 21492 確率過程における最大応答抽出法の精度について
江原栄次(日本大)・石丸辰治
- 22061 LVL材と集成材の力学的特性に関する実験的研究 南極昭和基地居住棟の実大構造ユニットに関する強度試験を通して(その1 実験概要および結果)
小室徹郎(日本大)・平山善吉・斉藤俊一・小林宏輝・荒井 淳
- 22062 LVL材と集成材の力学的特性に関する実験的研究 南極昭和基地居住棟の実大構造ユニットに関する強度試験を通して(その2 実験結果および立体解析についての検討)
荒井 淳(日本大)・平山善吉・斉藤俊一・小林宏輝・小室徹郎
- 22322 開断面鉄骨柱の局部座屈補剛・カバープレート補強に関する数値解析的研究
森瀬修司(桂設計)・高橋弘樹・横山 渡・半貫敏夫
- 23100 非線形有限要素法を用いた地震荷重を受けるRC造耐震壁の破壊挙動解析
小島貴人(青木繁研究室)・白井伸明・森泉和人・佐伯昭博・安達 洋・青山博之
- 23142 超大型寸法を考慮したRC梁のせん断強度の寸法効果(その1)実験概要および結果
田村真利(西松建設)・白井伸明・森泉和人・安達 洋・青山博之
- 23143 超大型寸法を考慮したRC梁のせん断強度の寸法効果(その2)破壊力学概念を用いたせん断強度式
白井伸明(日本大)・森泉和人・田村真利・安達 洋・青山博之
- 23197 鉄筋コンクリート造架構の仕口部の力学的挙動(その1 実験概要,破壊性状)
溝上隆浩(日本大)・岡田 満・浜原正行・末次宏光・崎山和隆
- 23198 鉄筋コンクリート造架構の仕口部の力学的挙動(その2 荷重変形関係,塑性ヒンジ部と仕口部の挙動)
岡田 満(日本大短大)・溝上隆浩・浜原正行・末次宏光・崎山和隆
- 23246 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震性能に関する基礎的研究
清水 泰(東京工大附属高)・広沢雅也・白井伸明
- 23390 地震応答解析に基づく梁降伏先行RC建物の損傷評価
田島徹也(日本大)・白井伸明・森泉和人・北嶋桂二
- 23406 粒子モデルを用いたコンクリート構造物の破壊解析(その1)解析モデル
須賀啓晶(日本大)・白井伸明・森泉和人・佐伯昭博・田島徹也
- 23407 粒子モデルを用いたコンクリート構造物の破壊解析(その2)引張応力下の破壊解析
佐伯昭博(日本大)・白井伸明・森泉和人・須賀啓晶・田島徹也
- 23427 連続開口を有するプレストレストコンクリート梁の力学的挙動に関する実験的研究(その1 実験概要と実験結果)
斉藤こずえ(日本大)・倉持春夫・奥田雅志・浜原正行・皆川尚之・本岡順二郎
- 23428 連続開口を有するプレストレストコンクリート梁の力学的挙動に関する実験的研究(その2 実験結果の考察)
皆川尚之(日本大)・倉持春夫・奥田雅志・浜原正行・斉藤こずえ・本岡順二郎
- 23429 連続開口を有するプレストレストコンクリート梁の力学的挙動に関する実験的研究(その3 実験値と計算値の比較)
奥田雅志(日本大)・倉持春夫・皆川尚之・浜原正行・斉藤こずえ・本岡順二郎

- 23439 プレテンション・ポストテンション合成梁の力学的挙動に関する実験的研究(その1 実験概要および実験結果) 丸野 浩(日本大)・屋田研朗・江口尚之・中山 優・本岡順二郎
- 23440 プレテンション・ポストテンション合成梁の力学的挙動に関する実験的研究(その2 実験結果の検討) 江口尚之(日本大)・屋田研朗・丸野 浩・中山 優・本岡順二郎

振動

振動関係の論文は、構造 に分類された538題の論文の他、構造 , 構造 , 構造 でも、振動実験や耐震性調査、あるいはダンパー等の制震デバイスの開発や耐震設計法に関する研究等々が発表され、これらを全て数えると1,000題を越える非常に多くの論文が報告されている。

これは1995年兵庫県南部地震による大震災を反映した、高い対地震性能を有する建築物の実現という社会的要請を受けた研究・開発活動の成果であると同時に、建築基準法の性能規定への移行を受けた、性能明示型設計法の構築を目指した基礎資料の整備を産・学・官が推進しつつあることの現れでもある。

建築学教室からは、石丸教授と新谷助手のグループから15題、短大下村助教授が1題の論文を発表している。

本年度は、「阪神・淡路大震災から得た教訓と今後の課題 日本建築学会最終提言に向けて」と題した総合研究協議会、「地震動の非線形解析」と題した災害部門の研究協議会、「建築構造物の性能設計における数的手法の可能性」、「限界状態設計法における要求安全性」、「耐震設計における性能評価 耐震・免震・制震(振)構造の比較」、「鋼構造柱梁接合部の耐震要求性能と実挙動」と題した4つのパネルディスカッションが開かれた。

また、特別企画「技術と建築 建築技術模型展」の一環として、石丸教授と新谷助手のグループが、「木造を含む軽量構造物の免・制震構造」に関する公開振動実験を実施し、1,700名を越える来場者が免・制震の効果を体験した。(新谷隆弘)

地盤・基礎

この分野の論文発表は140編(昨年度180編)で、このうち86編がポスターセッション、54編が口頭発表の形式で行われた。内容別に分類すると、杭の鉛直・水平支持力関連39編、山留め壁・地盤アンカー関連15編、土の性質・地下外壁・地盤改良関連45編、液状化・動的問題・兵庫県南部地震関連41編である。

昨年度は兵庫県南部地震における杭基礎の被害事例・調査・補修に関する論文が多く報告されたが、本年度はさらにその杭基礎の被害事例を踏まえての被害分析に関する研究論文が数多く報告されたのが特徴である。

本学科からは、液状化に関する研究3編の他に、壁体土圧、基礎梁の変形性状、地盤改良に関する研究が各1編ずつ計6編の論文が発表された。

また、本年度の「地盤の変形係数 変形を重視した設計とするために」と題して行われたパネルディスカッションでは、安達助教授がパネラーとして「土要素の変形特性」について主題解説をされた。ここでは、建築基礎の設計に地盤の変形係数を適用するにあたっての問題点とそれを設計のなかでどのように位置づけたらよいかについて、活発な討論がなされた。(山田雅一)

シェル・空間構造

本分野では、昨年よりやや少ない132編の研究報告がなされた。内訳は、ケーブル・膜・ハイブリッド構造48編、シェル構造19編、振動関連27編、ラチス構造の座屈19編、計画・開発関連19編であった。

本年は、実構造物(長野オリンピック・スピードスケート場、大阪ドーム、パークドーム熊本、熊本県民スタジアム)に対する構造計画・施工法の紹介や、空間構造の構造特性・振動性状・最適問題に関する解析的研究が数多く報告された。解析技術は年々向上してきており、解析モデルの精密化が進む一方で、簡略化の検討も行われていた。

また本年は、可変システムや開閉屋根などの構造システムの開発、およびアルミニウムやCFRPなどの新素材の空間構造への適用に関する研究が特徴として挙げられる。

建築教室からは、ケーブル構造4編、ハイブリッド構造9編、風洞実験2編、アイスドーム2編の計17編が発表された。

本分野関連として「テンション構造のデザイン 新たな課題と世界の動向」と題してパネルディスカッションが行われ、斎藤公男教授がパネリスト、黒木二三夫専任講師が副司会として参加された。構造設計者だけでなく、建築家や材料(膜・ケーブル)メーカーが一堂に参加し、それぞれの立場からテンション構造の実状を把握・分析・評価するとともに、実際の応用例の紹介が行われた。国際化を迎えつつあるテンション構造のデザインについて、パネリストだけでなく参加者からの意見も交えながら活発な討論が行われた。(岡田 章)

各種構造

本年度の構造分野における論文題数は、構造 が528編(24.9%)、構造 が538編(25.4%)、構造 が561編(26.5%)、構造 が492編(23.2%)の計2,119編であり、昨年の2,220編を下回っている。近年、「免震・制震構造」や「ハイブリッド構造」など、多様な構造システムが普及しつつあり、構造種別の一義的な分類が困難であるが、ここでは、鉄筋コンクリート(RC)構造、鋼(S)構造、プレストレストコンクリート(PC)構造、木構造などの各種構造に関連する論文の概要について述べる。

本年度の特徴は、昨年度に引き続き、兵庫県南部地震で被災した建物の耐震診断や耐震補強法(新素材やダンパーを利用した補強法を含む)に関する研究が多数報告されたほか、地震動と震害の関係を扱った研究や性能設計を目指した研究が目目をひいた。

本学科からは15編の論文が発表された。内訳として、

RC構造7編、S構造1編、PC構造5編、木構2編である。内容は、RC構造では、非線形FEMによる地震荷重を受ける耐震壁の動的破壊挙動解析に関する研究が1編、超大型はりのせん断強度の寸法効果に関する研究が2編、既存建物の耐震診断に関する研究が1編、地震応答解析に基づく建物の損傷評価に関する研究が1編、およびマイクロやメゾモデルを用いたコンクリートに破壊挙動解析に関する研究が2編であった。

S構造では、開断面鉄骨柱の局部座屈を防止するための補剛・補強法に関する解析的研究が1編であった。

PC構造では、ダクトや配管等を想定した開口をもつPCはりの力学的挙動に関する実験的研究が3編、およびプレテンション・ポストテンション合成はりの力学的挙動に関する実験的研究2編であった。

木構造として、南極昭和基地建物を対象としたLVL材と集成材の力学的特性に関する実験的研究が2編であった。(白井伸明)

環境工学

- 40012 集合住宅の界床の遮音性能と居住者意識との対応 集合住宅の住まい方と生活環境の意識に関する研究(その13) 萩 美知子(日本大)・木村 翔・梶 裕佳子・唐沢 亮
- 40013 集合住宅居住者の音環境に対する満足度評価のパス解析 集合住宅の住まい方と生活環境の意識に関する研究(その14) 梶 裕佳子(西友)・木村 翔・萩 美知子
- 40016 高速道路沿いに建つ集合住宅居住者の外部騒音に対する意識 武田充弘(日本大)・木村 翔・井上勝夫・福山由美子
- 40027 客席空間に対するステージ形態の音響効果に関する基礎的検討 その1 1/10縮尺音響模型によるエンドステージ形態に対する音響特性 木村文紀(日本大)・関口克明・杉野 潔・石田康二・鎌倉貴志・長町一生
- 40028 客席空間に対するステージ形態の音響効果に関する基礎的検討 その2 1/10縮尺音響部分模型によるエンドステージ形態に対する音響特性 鎌倉貴志(日本大)・関口克明・杉野 潔・石田康二・長町一生・木村文紀
- 40029 仮想音源分布の異なる音場におけるソロ演奏者を想定した主観評価実験 廣瀬大輔(日本大)・木村 翔・橋本 修
- 40032 残響とエコーが音声の「聞き取りやすさ」に及ぼす影響について その2 「聞き取りやすさ」と物理指標の関係 萩野矢知弥(新菱冷熱工業)・木村 翔・橋本 修・横山恵津子
- 40033 応答性状を可変した残響音場における「聞き取りやすさ」と評価値との関係 橋本 修(日本大)・木村 翔・萩野矢知弥・横山恵津子
- 40034 方向別応答の違いが音声の「聞き取りやすさ」に与える影響について 横山恵津子(日本大)・木村 翔・橋本 修・萩野矢知弥
- 40039 側方エネルギー率と音場の空間印象に関する基礎的検討 千葉 俊(日本大)・木村 翔・橋本 修・羽入敏樹・中島 亨
- 40040 音場の空間印象における反射音間の相互作用に関する基礎的検討 羽入敏樹(日本大短大)・木村 翔・橋本 修・千葉 俊・中島 亨
- 40041 音場合成のための反射音時間構造を考慮した残響音作成手法の検討 渡辺充敏(大林組技研)・木村 翔・山口 順・吉田俊也・朴 相俊・佐藤正之・平野 滋
- 40042 音場合成のための残響領域における周波数特性の簡易的予測 吉田俊也(日本大)・木村 翔・渡辺充敏・山口 順・朴 相俊・佐藤正之・平野 滋
- 40043 付加する残響音の違いによる合成音場の比較聴感実験 山口 順(大成建設)・木村 翔・渡辺充敏・吉田俊也・朴 相俊・佐藤正之・平野 滋

- 40051 形態係数（立体角投射率）による拡散性の検討 鈴木壯右（東海興業技研）・関口克明・坂口伸一・上野博由記
- 40058 送風機の加振力と防振効果の測定例 田野正典（鹿島技研）・井上勝夫・中澤真司・平松友孝・下西知行・稲留康一
- 40063 多点加振モデルを用いた軌道上建物の振動影響予測 益田 勲（東急建設）・木村 翔・井上勝夫
- 40067 インピーダンス法による床スラブ振動特性予測手法に関する実験的検討
中澤真司（鉄建建設）・井上勝夫・富澤秀夫
- 40068 根太床，置床構造のマス付加時の駆動点インピーダンス特性（歩行感からみた居住床の適正弾性と床衝撃音遮断性能に関する研究：その16） 渡辺秀夫（戸田建設技研）・木村 翔・井上勝夫・平光厚雄
- 40069 円形中空部を有するボイドスラブの駆動点インピーダンス特性に関する検討
豊田雅士（日本大）・木村 翔・井上勝夫・下野忠彦
- 40070 200mm厚PCaスラブのインピーダンス特性について 坂口伸一（東海興業）・井上勝夫・木田寛治
- 40072 PC板型枠を用いた床スラブの音響・振動特性 平松友孝（大成建設技研）・河原塚 透・大川平一郎
- 40076 普通コンクリートスラブ素面の軽量床衝撃音レベル周波数特性について
小田 聡（住宅・都市整備公団）・鎌田一夫・井上勝夫
- 40082 床仕上げ構造と年代の変化による住宅床の歩行感の違いについて 歩行感からみた居住床の適正弾性と床衝撃音遮断性能に関する研究：その13
矢後佐和子（日本大）・木村 翔・井上勝夫・石井健太郎・平光厚雄・渡辺秀夫・松岡明彦
- 40083 住宅床の歩行感と物理量との対応に関する検討 歩行感からみた居住床の適正弾性と床衝撃音遮断性能に関する研究：その14 平光厚雄（鉄建建設）・木村 翔・井上勝夫・石井健太郎・矢後佐和子・渡辺秀夫・松岡明彦
- 40084 歩行シミュレーション加振による床仕上げ構造の動的変位特性 歩行感からみた居住床の適正弾性と床衝撃音遮断性能に関する研究：その15 石井健太郎（竹中工務店）・木村 翔・井上勝夫・中川志郎・渡辺秀夫・松岡明彦
- 40089 「コンクリート床上の床仕上げ構造の軽量床衝撃音レベル低減量の実験室測定法」のJIS化 その1：本測定法規格の検討経緯と概要 福島寛和（建設省）・井上勝夫・安岡正人
- 40090 「コンクリート床上の床仕上げ構造の軽量床衝撃音レベル低減量の実験室測定法」のJIS化（その2：試料施工法の検討） 井上勝夫（日本大）・福島寛和・安岡正人
- 40096 建物躯体から内装材への振動伝搬に関する実験的検討（その3 制振遮音板の音響放射特性）
河原塚 透（大成建設技研）・平松友孝・大川平一郎・子安 勝・作宮一新
- 40379 生理・心理反応を用いた路面評価に関する研究 その1 車椅子走行時の脳波測定に関する検討
川浪大輔（日本大）・関口克明・杉野 潔・井上 諭・三沢 茂・鈴木直行
- 40380 生理・心理反応を用いた路面評価に関する研究 その2 後輪車軸における振動レベルと走行感による路面評価の検討 鈴木直行（日本大）・杉野 潔・井上 諭・三沢 茂・関口克明・川浪大輔
- 40476 集合住宅の居住下における複合環境の実態と評価に関する研究 その1 温熱・音環境の5ヶ年の実態に基づく評価法への手続き 吉野泰子（日本大短大）・関口克明・田中和之
- 40477 集合住宅の居住下における複合環境の実態と評価に関する研究 その2 光・空気環境の5ヶ年の経時変化の傾向と模擬居住下における検証 田中和之（日本大）・関口克明・吉野泰子
- 40478 集合住宅の居住下における複合環境の実態と評価に関する研究 その3 住まい方によるカビ発生防止方法の試みとコンピュータ支援による解析手法の検討 割石浩幸（小山能開短大）・関口克明・吉野泰子
- 41171 高齢者の日常生活における血圧の24時間変動の実測調査 その2 室内熱環境と血圧との関係
佐藤篤史（郡山女大）・吉田 燦
- 41172 高齢者居住施設の温熱環境について その9 首都圏における各種老人ホームの冬季の実測調査
金子耕二（大林組）・吉田あきら・蜂巢浩生
- 41453 実験動物施設の環境制御について（第XXV報 従来システムと一方向流システムの換気量について NH₃濃度を指標として） 石井要憲（ダイダン技研）・吉田 燦・蜂巢浩生・朱宮正剛・吉田一也・長谷川雅一

環境工学

この分野では1,007編の論文が発表された。内容は例年どおり多岐にわたり、われわれの身の周りのもの全てが環境構成要素として取り上げられている感がある。これからの建築環境、さらには地球環境にとって「環境のクォリティの向上」が、いかに重要な課題として位置付けられているかを物語っているものと言えるだろう。

一般講演では、騒音対策や音場評価，集合住宅・オフ

イスの室内環境評価，床吹出し等の空調システムについても多くの新たな知見が報告されるとともに、シックハウスの原因となるホルムアルデヒド（HCHO）や揮発性有機化合物（VOC）の調査報告やその対策に関する研究報告に関心が集まっていた。

また、今年度初めてオーガナイズドセッションが企画され、「固体音の制御技術」「都市環境予測法」「環境共生建築」の3つが催された。それぞれに今注目を集めて

いる話題である。固体音制御は、建築の性能設計に直接的に係わるテーマである。他の2テーマは、都市の抱えている大気汚染などの環境負荷要素を明確にし、消費エネルギー削減への方向性を模索し、自然エネルギーの利

用を推進していこうとするものである。「環境共生」というキーワードは、環境工学分野のみならずさまざまな方面に浸透していくに違いない。(蜂巣浩生)

建築計画

- 5008 老人デイサービスセンターE型における建築環境の基礎的研究
福原康司(日本大)・八藤後 猛・柴野あゆ子・野村 歡
- 5009 高齢者デイサービス施設の利用に関する研究 その1
石田道孝(日本大)
- 5034 視覚障害者の歩行環境バリアフリー化に関する研究 その2 日本とスウェーデンにおける音響信号の現状と施策への課題
野中俊宏(日本大)・関口克明・吉野泰子・野村みどり
- 5095 医療施設における作業療法機器の設置及び使用頻度に関する調査 医療施設におけるリハビリテーション空間に関する研究 その1
土生多恵子(日本大)・鳥崎 武・野村 歡・八藤後 猛・石川 朗
- 5096 医療施設における理学療法機器の設置及び使用頻度に関する調査 医療施設におけるリハビリテーション空間に関する研究 その2
鳥崎 武(日本大)・土生多恵子・野村 歡・八藤後 猛・石川 朗
- 5133 東京都板橋区立小学校の増改築に関する考察(小学校の施設再整備に関する研究 その1)
岡田真人(日本大)・関澤勝一・村田逸平
- 5134 東京都板橋区の地域特性からみた小学校の余裕教室の利用に関する基礎的研究(小学校の施設再整備に関する研究 その2)
村田逸平(日本大)・関澤勝一・岡田真人
- 5158 小学校生活科との共同利用を可能とする障害児学習ユニットの提案
関澤勝一(日本大)・佐藤直樹
- 5162 学校の空間計画における「地域」「環境」概念について・序論(地域環境学習施設としての学校 の位置づけに関する研究)
宇杉和夫(日本大)
- 5170 東京都立文京盲学校高等部普通科における生徒の移動に関する現況調査
矢板文男(日本大)・関澤勝一・岡田真人
- 5173 肢体不自由学級の児童行動観察 交流レベルと日常生活動作からみた学校建築計画に関する基礎的研究 2
矢代瑞昌(日本大)・野村 歡・八藤後 猛・若木 滋
- 5176 公開演奏誕生期における演奏家と聴衆の関係
逆瀬川和孝(日本大)・本杉省三
- 5188 野外上演施設の概要と利用形態 野外上演施設の現状についての基礎的調査研究(その1)
青池佳子(日本大)・小泉さおり・本杉省三
- 5189 野外上演施設における付帯施設の利用状況 野外上演施設の現状についての基礎的調査研究(その2)
小泉さおり(日本大)・青池佳子・本杉省三
- 5629 住宅産業等における高齢化対応商品開発・販売への意識の実態に関する研究(住宅用部品・設備の高齢化対応に向けた基盤整備に関する研究 1)
野村 歡(日本大)・八藤後 猛・田中 賢
- 5630 住宅産業等における高齢化対応商品への研究開発実態に関する研究(住宅用部品・設備の高齢化対応に向けた基盤整備に関する研究 2)
八藤後 猛(日本大)・野村 歡・田中 賢
- 5631 住宅産業等における高齢化対応商品への販売実態に関する研究(住宅用部品・設備の高齢化対応に向けた基盤整備に関する研究 3)
田中 賢(日本大)・野村 歡・八藤後 猛

建築計画

建築計画部門の論文発表総数は633編で、昨年とほぼ変わらなかった。本学科関係者の発表は合計17編で昨年よりは増え、例年並みであった。

セッション別には、老人福祉2編、福祉のまちづくり1編、医療関係2編、小学校・中学校4編、障害児教育施設2編、劇場・ホール3編、高齢者設備3編であった。

今年も昨年同様、居住関係が建築計画 としてまとめられた。建築計画 では昨年同様老人福祉関係の発表数

の割合が多かったが、病院・医療、小学校・中学校関係の発表の増加も目立った。建築計画 ではここ数年の傾向であるが、海外居住の発表数が多いことに特徴がある。居住の多様化の認識のもとに、会場では活発な意見交換があった。研究の内容としては現状事例調査が最も多く、分析と評価の手法が次いで、考え方・提案などは少ないが、空間の価値観が多様化している現在、現状の特徴ある問題認識把握に基づいた方向性をもっと模索されてよいと考えられる。(宇杉和夫)

都市計画・建築経済・住宅問題

- 7092 都市の景観表彰制度とその実態の調査研究（埼玉県下の都市事例） 馬野宏貴（日本大）・宇杉和夫
7093 景観整備事業による波及効果に関する研究・長野県小布施町を事例として（その1 住民参加のプロセスに着目して） 浅川貴史（日本大）・浦島靖子・川島和彦・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
7094 景観整備事業による波及効果に関する研究・長野県小布施町を事例として（その2 建築物の修景の実態） 川島和彦（日本大）・浅川貴史・浦島靖子・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
7095 景観整備事業による波及効果に関する研究・長野県小布施町を事例として（その3 波及効果の促進要因） 浦島靖子（日本大）・川島和彦・浅川貴史・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
7228 事業採算性からみた密集住宅市街地における共同建替えの促進に関する研究（世田谷区太子堂の事例分析を通して） 谷澤 賢（千葉市役所）・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
8057 首都圏のHOPE計画の実績に関する研究 千葉県・埼玉県・群馬県の比較 島田健司（日本大）・宇杉和夫
8122 木造専用住宅のストックと耐震診断・改修制度に関する調査研究 中島健輔（昭和）・三橋博巳・加藤裕久

都市計画・建築経済・住宅問題

都市計画部門の学術講演会では、455題（うち、ポスターセッション13題）の論文発表が行われ、本学科からは5題の発表があった。5題のうち4題は都市景観をテーマとしたもので、自治体の景観行政の一環として近年事例が増加している景観表彰制度の実態について調査した研究（7092）と、自治体が行う拠点的な景観整備事業が周囲にもたらす影響を波及効果として捉え分析した研究（7093～7095）である。なお、この研究の一部は卒業研究として行われたもので、本年の日本建築学会優秀卒業論文賞を受賞している（論文名：「景観整備事業が住民意識に与える影響に関する研究 長野県小布施町における景観整備事例の分析を通して」、受賞者：浅川

貴史・浦島靖子）。あと1題は、不動産科学専攻卒業生のもので、木造密集市街地の共同建替えを促進するための条件を事業採算性の分析から求めた研究である。

建築経済・住宅問題部門では、全体で135題の論文発表があり、本学科からは2題の発表が行われた。1題は住宅政策のセッションで首都圏3県のHOPE計画の実績を比較検討したもの、もう1題は戸建住宅ストックのセッションで耐震診断・改修制度を取り上げた研究発表である。

学術講演会以外にも、研究協議会、パネルディスカッション、研究懇談会、景観展（パネル展示）などの行事が行われ、その企画・運営に本学教員、学生が多く参加、協力した。（根上彰生）

建築歴史・意匠

- 9030 蔵田周忠の住宅設計活動について（乾式工法住宅を中心とする考察） 矢木 敦（日本大）・大川三雄
9047 建築専門出版社・洪洋社の出版活動について（その1 編者と出版物の変遷） 大川三雄（日本大）・川嶋 勝
9048 建築専門出版社・洪洋社の出版活動について（その2 社主・高梨由太郎の事績） 川嶋 勝（日本大）・大川三雄
9173 ドイツ工作連盟の設立過程における第3回ドイツ工芸展の位相 田所辰之助（日本大）
9179 カレル・タイゲのチェコスロヴァキア近代建築運動に果たした役割について 建築理論家カレル・タイゲ研究・その1 市川祐子（RDD Inc.）・矢代真己・近江 栄
9180 論文「構成主義の理論」にみるタイゲの近代建築理念について 建築理論家カレル・タイゲ研究・その2 矢代真己（日本大）・市川祐子・近江 栄
9188 ATO Architects 'Technicians 'Organizationとパーソルド・リュベトキン パーソルド・リュベトキン Berthold Lubetkin 研究 その3 渡辺研司（AA スクール）
9219 朝鮮時代木造建築の「柱心包系」及び「多包系」別にみた架構形式について（その13） 片桐正夫（日本大）
9239 明命帝陵の配置計画について ヴェトナム・フエの明命帝陵の総合調査 その6 重枝 豊（日本大）・片桐正夫
9240 パンテアイ・クデイにおける回廊屋根の構成と施工手法に関する一考察 崔 炳夏（日本大）

建築歴史・意匠

本学の船橋校舎を会場とした大会も無事に終了した。例年は、自分の研究発表のみに気を遣うだけの大会が、さすがに今年は、それぞれの部屋の様子やら全体の会場の様子などが気がかりな3日間であった。歴史意匠部会の発表会場は、4号館4階の442と443の二つの部屋を使って行った。会場そのものに対する不満はなかったが、発表会場の近くに休憩室がほしかったとの意見があった。

歴史意匠部門での発表題数は274題、ここ数年は280題を越していたことを考えると、少し減少気味であったが、建築史研究室からの発表は、地元開催の気運を反映して昨年同様の10編に及んだ。

日本近代の分野からは3編が出された。9030の研究は矢木君が昨年の卒業研究としてまとめたものの一部を取り上げたもので、今後も何編かの論文として発表される予定である。9047と9048の2編は、川嶋君が卒業研究で取り上げたもので、最近の歴史・意匠の分野ではあまり行われていない建築ジャーナリズム史の一環としてまとめたものである。

西洋近代の分野からは4編が出ている。9173は短大助手の田所先生の研究で、本年、東京大学に提出された博

士論文のテーマの延長上に位置するものである。9179と9180の2編は、2年前に大学院を修了した市川さんと短大非常勤講師の矢代さんとの共同研究で、今日的な研究テーマとして注目を浴びている東ヨーロッパの近代建築史に関する研究である。今回は、そこでのキーパーソンとしてのカレル・タイゲという人物に焦点を当てている。9188はここ数年の継続研究でAAスクール博士課程在学中の渡辺さんのイギリス近代建築史に関する論文。

東洋建築史の分野では3編。9219は、片桐先生の朝鮮時代木造建築に関する継続研究の(その13)に当たるもの。ベトナム関係では2編、9239は解体調査と並行して研究が進められているフエの明命帝陵の報告、9240は、大学院博士課程に在学中の崔さんによるバンテアイ・クデイ遺跡に関する研究である。

今年の研究協議会のテーマは、「近代建築史研究の現在」と題するもので、近年の日本および欧米近代建築史研究の隆盛を受けて、研究史的な立場からの問題点を整理したもので、世界的な問題となりつつある近代建築の保存問題も含めて活発な議論が行われた。442教室いっぱい参加者を得て成功裡に終了した。また、歴史意匠の懇親会は、大正9年に作られた丸の内の日本工業倶楽部において開催された。(大川三雄)

以上の学術研究発表のほか、各分野の研究協議会、パネルディスカッション、研究懇談会等でも教室の先生がたが活躍した。基礎構造パネルでは安達俊夫助教授が土要素の変形特性について主題解説を担当、シェル・立体構造・膜構造パネルでは、黒木二三夫専任講師が副司会、斎藤公男教授が趣旨説明を担当した。また、「構造設計の面白さを伝える 教育の現場から」をテーマに行われた建築教育部門研究懇談会で、斎藤公男教授が主題解説(兼パネリスト)、都市計画部門研究懇談会「アーバンフリンジの土地利用 生産緑地制度の改変と効果」では根上彰生助教授が副司会を務めた。



特別企画「技術と建築」屋外展示の休憩テント



大型構造物試験棟で行われた「技術と建築」公開振動実験



「建築・環境と子供たち 未来への架け橋」ワークショップ



ファラディーホールでの「情報技術とCAAD教育の現場展」

優秀卒業論文，優秀修士論文表彰

建築学会大会行事の一環として9月13日に行われた卒業論文等表彰式では、本学からも次の諸君が晴れの表彰を受けた。本年度第8回目を迎えるこの学生を対象とした日本建築学会の顕彰事業は建築教育振興基金（タジマ基金）によるものである。本年の分野別応募数の内訳は、卒業論文55編（構造系17，計画系28，環境系10），修士論文81編（構造系20，計画系43，環境系18），合計136編で、全国39大学からの応募であった。部門別に2段階方式で行われた厳正な審査の結果、15編の卒業

論文，15編の修士論文が今年の表彰対象に選ばれた。建築教室から応募して優秀論文に選考されたものは、先に「駿建」夏季号で紹介した駿建賞及び桜建賞受賞作品でもある。建築学会誌に掲載された選考委員会による推薦理由書とともに紹介する。



尾島俊雄建築学会会長から表彰状を受ける石井健太郎君

1997年日本建築学会優秀修士論文（環境系）
実歩行に対応する衝撃シミュレータの開発と住宅床の振動応答特性に関する研究
石井健太郎（現・竹中工務店）

指導：木村翔教授，井上勝夫助教

（推薦理由）

本研究の密度の高さには驚かされ、優秀修士論文賞に十分値するものである。著者の並々ならぬ努力に頭が下がるものである。

住宅床を人が歩行する時の、床の時間・空間・周波数領域での動的物理量（動的ばね定数，変形特性，インピーダンス特性）から人の歩行を捉え、これを模擬する歩行ロボットに似た装置を開発している。これと従来の簡便な模擬装置を比較し、従来の装置の有効性も確認している。これらの装置を伝統的木造建築を含む様々な住宅床に適用し、床構造ごとの特性を分析している。

今後は、床構造ごとに適正な断面構造を、居住性能の観点から特定していくことが期待される。

1997年日本建築学会優秀卒業論文（構造系）
倍力機構を用いた制振デバイスに関する基礎的研究
本間 剛（現・日建ハウジングシステム），帆刈大慈（現・大成建設）

指導：石丸辰治教授，新谷隆弘助手

（推薦理由）

本論文は、一昨年の阪神・淡路大震災により耐震技術を世界的に誇っていたわが国の建築界が大打撃を受け、建物の安全性をいかに評価すべきか議論されてきた背景を踏まえ、既存の建物にも適応可能で、かつ高い対地震構造安全性能を付与しうる制震機構を提案したものである。これは、倍力機構と補助質量を組み合わせ、構造物

に組み込むことにより構造物の地震応答を低減できるという理論に基づいている。

本論文は、特に制震機構を組み込んだ構造物模型を対象に、その基本的な性質を解析的に把握し、かつ実験により提案した制震機構がきわめて効果的であることを明らかにしており、卒業論文として高く評価されるものである。

1997年日本建築学会優秀卒業論文（計画系）
景観整備事業が住民意識に与える影響に関する研究
長野県小布施町における景観整備事例の分析を通して
浅川貴史（現・日本大学大学院），浦島靖子（現・日本大学理工学研究所研究生）

指導：小嶋勝衛教授，根上彰生専任講師，宇崎勝也助手

（推薦理由）

本論文は、住民参加型まちづくりにおいて、景観整備が果たす役割を詳細な実態調査をもとに、その意義と有用性について論じたものである。

研究内容として、景観整備が住民意識の変化と住民参加によってその整備効果を上げるものとする仮説に基づき、景観整備による個人意識の変化、自宅の景観に対する配慮への変化などといった広範な角度から、住民意識からみた景観整備による影響を検証したものである。特に住民の発意によって主体的に修景されたプロセスを6段階に分けることを試み、それぞれについて住民意識形成と整備内容を明快に論考している点については高く評価できる。

論旨の展開がやや分かりにくい点や、ケーススタディとしたモデル地区の捉え方に強引なところもみられるが、卒業論文としてレベルが高く、顕彰に値するものとしてここに推薦する。



自然体の建築を作る

鳥居 和茂

二つの設計事務所を経て、日大同期の妻と設計事務所を開設してから21年が過ぎました。夫婦が共に設計者として仕事をしている事務所は他にもあると思いますが、仕事上の意見調整などに私生活の感情対立などが紛れ込みやすいので努力が必要です。このような難点はありますが、個人建築主との仕事が多いので、夫婦で打ち合わせを分担したりすることによって、建築主側の夫と妻（男と女）のそれぞれの立場の本音を聞きやすいことなどを前向きに考えて、この体制を続けてきました。

作品は戸建住宅・別荘・集合住宅・特別養護老人ホームなどの居住のための建築が大半を占め、残りは商業施設・診療所などですが、比較的小規模で地味な建築になっています。「シンプルイズザベスト」とまで言い切ることはできませんが、計算されたシンプルさに魅力を感じていますので、特別な場合を除いて装飾的なものを抑えた作品になっていると思います。

作品それぞれが特殊解と言ってもよいものですから、作品の目指してきた共通のコンセプトはありませんが、感覚的表現で言えば自然体の建築を目指してきました。敷地の形状や要求される機能などの設計条件から自然に形作られてはいるが、敷地周辺の環境に溶け込んでいて、控目でいながら存在を主張しているような建築を自然体の建築と言ってもよいのではないかと思います。

「自然体」は、本来柔道用語で攻守両様に变化できる自然に立った姿勢ということだと思いますが、控目な感

じでありながら十分存在感があるという感覚が魅力的です。年齢を重ねるにつれて好きになってきた言葉で、私の生活や仕事における信条でもあります。

自然体の建築では私的領域の建築と公的領域の道路との間に存在する公私の中間領域の敷地の計画も大切だと考えています。資金不足で提案通りに実現しないこともありますが、建築が道路歩行者に与える圧迫感を和らげるために、敷地の景観をできる限り演出し、開放することを心掛けています。

建築を作ることは周辺の環境から人間の身を護る防壁を作るのではなく、人間が生きていくための新しい環境を作り出すことだと思いますから、周辺の既存の環境と相対することになります。建築する地域の自然や風土だけではなく、生活や人情などについてもできるだけ考え、周辺の環境に敵対することなしに、良い影響を与えるような提案をしていきたいと考えています。

(短大非常勤講師 建築設計製図 ・)

筆者略歴

鳥居 和茂(とりい かずしげ)
 1946年 東京都生まれ
 1970年 日本大学理工学部建築学科卒業
 1970～74年 (株)西原研究所勤務
 1974～76年 (株)氏家隆正設計事務所勤務
 1976年 NOA設計室を設立し現在に至る
 1983～89年 日本大学理工学部海洋建築工学科非常勤講師
 1996年～ 日本大学短期大学部非常勤講師



T邸
 T邸茶室
 N邸
 特別養護老人ホーム那須順天荘
 Y山荘

去る7月24日、前主任、木村翔教授の任期満了に伴う建築学科教室主任の選挙が行われ、新しい教室主任に齋藤公男教授が選出された。任期は平成9年10月から2年。その後、両教授の間で事務引継ぎが行われ、新任主任の仕事は10月からスタートしている。

同じく7月24日午後6時30分から都市計画研究室卒業生、日本大学校門建築会会長、工科校友会建築部会長および建築学科教授が発起人となって「小嶋勝衛先生の理工学部長就任を祝う会」がアルカディア市ヶ谷（私学会館）富士の間で盛大に行われた。当日は瀬在幸安総長、瀧見浩之千代田区都市整備部長らの来賓をはじめ総勢約450名が参会し、小嶋「新」学部長へのお祝いと期待が語られた。建築学科からも多くの教員が参加、協力した。

ダルムシュタット工科大学のザビーネ・リッケンベルグさんが平成9年度・賞書に基づく交換留学生として8月に来日、平成10年2月までの6ヵ月間、建築学科の本杉省三助教授のもとで日本の建築を勉強することになった。

建築学科2年登坂華弥子君が賞書に基づく日本大学海外派遣交換留学生に選ばれ、アメリカのワシントン州立大学に留学することになった。出発は平成10年1月の予定。

日本大学在職47年、理工学部や建築教室の歴史を最もよく知る炭谷昭子主事が8月25日をもって大学を定年退職された。長い間ごころうさまでした。

平成9年度海外招聘研究員として中国・西安建築科技大学の張光先生（元外事弁公室主任）と夫人殷小鵬先生が10月20日に来日、学術講演会での特別講演をはじめとして、駿博会・建築学科講演会、大学院特別講義などで精力的に活躍、11月19日に元気で帰国された。教室の窓口役として両先生滞日中のお世話をいただいた片桐正夫教授、宇杉和夫専任講師、ごころうさまでした。

本年度からの新しい試みとしてスタートした建築学科4年生の「卒業制作」の作品提出受付が10月25日（土）に行われた。その後、教室の先生方全員の投票による優秀

教室ぶろむなード

作品の2段階審査があり、選ばれた作品について公開の講評会が11月8日（土）午後1時から先生方と学生が参加して行われた。各賞受賞者はまとめて次号で紹介する。

11月に行われた日本建築学会副会長および監事の選挙結果がこのほど発表され、建築教室の平山善吉教授が副会長に、齋藤公男教授が監事に選出された。任期は平成10年1月から2年間。教室こぞってバックアップし、両先生の活躍に期待しましょう。

平成9年3月に大学院不動産科学専攻を修了、現在理工学研究所研究生として都市計画研究室に所属する池末宏行君が難関として知られる不動産鑑定士の2次試験に合格、おめでとう。

佐藤稔雄名誉教授が前期試験中の7月15日に腎不全で急逝。翌16日の通夜、17日の告別式には教室の先生方が参列して冥福を祈った。その後、大学本部の尽力により8月末には従5位勲4等旭日小綬章が追贈された。

IASS（国際シェル・空間構造学会）における「坪井賞（Tsubo Awards）」を齋藤公男教授および岡田章助手が受賞した。昨秋、シュツットガルト会議に発表された「テンション構造のデザイン」と「構造教

育」に関する2つの論文が最優秀に選ばれたもので、11月14日、シンガポール会議の席上で授与式が行われた。

関口克明教授は、吉野泰子短大助教授および羽入俊樹短大助手とともに11月1日～3日、「環境・情報研究室」公開、またキャンパスウォッチングでは習志野市と協賛で市民体験型プログラムを実施した。

吉野泰子短大助教授は、1998年9月1日～8日、東アジアで初めて開催されるUIFA（International Union of Women Architects）国際女性建築家会議第12回日本大会において、論文審査委員を委嘱された。テーマは「環境共生時代の人・建築・都市」である。投稿等の問い合わせは、E-mail：yoshino@arch.jcn.nihon-u.ac.jpまで。

田所辰之助短大助手の学位請求論文「20世紀初頭のドイツ近代建築の発展過程における近代工芸理念成立史の研究」に対して、東京大学より博士（工学）の学位が授与された。

建築学会大会終了直後の9月17日、駿河台校舎1号館で第44回全国工業高等学校設計競技の審査会が行われた。今年のテーマは「たのしい住まい」、全国44校から148作品の応募があり、厳正な審査の結果、以下のような各賞が決まった。入賞作品の展示会は工学部、生産工学部、理工学部で順次開催される。なお、表彰式は12月8日に駿河台校舎で行われた。

審査結果

1等	松田 香織	大分県立日田林工高校	たのしい（音楽家族）の住まい
2等	橋本 篤	兵庫県立神戸工業高校（定時制）	みんなで住もう・アジア荘再生計画
	加島 佳子	静岡県立静岡工業高校	イーチュ ヤーマ
3等	大須賀健一	三重県立四日市工業高校	STAGE
	磯谷 郷志	群馬県立館林商工高校	「間（MA）」場の設定
	二反田照夫	大阪府立西野田工業高校	海を借景に取り込んだ住まい
佳作	望月 裕子	静岡県立静岡工業高校（定時制）	家ごとガーデニングをたのしむ住まい
	京原 弘典	堺市立工業高校	自力建設による車とともに暮らす家
	藤 悟志	群馬県立館林商工高校	ガキ大将の家
	高倉 公博	大分県立日田林工高校	伝統文化継承の中で
	江利山知行	青森県立弘前工業高校	自然が創るたのしい住まい
奨励賞（本年度新設）			
	山田 梨絵	三重県立四日市工業高校	Personal Home
	望月 紀江	静岡県立静岡工業高校	collective house 共に生きる
	藤澤 達哉	静岡県立静岡工業高校	風を奏でる家
	金井 知子	群馬県立館林商工高校	群馬の山並み
	鶴崎 亘	群馬県立館林商工高校	浮遊する自分 浮遊する家

駿建目次	1997年度日本建築学会大会	優秀卒業論文、優秀修士論文表彰	14
(1997.11 Vol. 25 No. 3 通巻99号)	(関東支部設立50周年記念大会)開催	私と作品	15
	1997年度日本建築学会大会(関東)	教室ぶろむなード	16
	建築学科教室関係者発表論文リスト		5

『駿建』 発行者・齋藤公男：千代田区神田駿河台1-8 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp
平成9年度編集委員：半貫敏夫・井上勝夫・宇杉和夫・蜂巣浩生・田所辰之助 印刷：奥村印刷株